

# 令和四年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日（午後） 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は14ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて女用心棒のバルサに守られながら危険な旅をした経験を持つチャグム皇太子。新ヨゴ皇国の帝位をつぐ尊い皇子として成長し、現在は十四歳である。彼は帝である父の代理としてサンガル王国に渡り、新国王即位の儀式に参加した。サンガルの新国王の弟タルサンは、まだ少年だが武勇に優れており、即位の祝いの席で演武に参加していた。チャグムの目の前で、サンガルの勇者たちとタルサンは、水上に浮かべた複数の舟の上で武術を披露し始めた。

ターン、と太鼓が響いた。と、男たちの身体がふたたび宙を舞った。対面していた男たちの身体が宙で交差し、拳帯を巻いたこぶしが身体をたたく音が虚空を渡ってきた。

別の舟に下りたつたとき、数人がよろめいたが、水に落ちる者はいなかった。

ターン、ターン、ターンと、しだいに速くなる太鼓の音に合わせて、男たちは敵の舟にむかって跳び、すれちがいざまに、敵をこぶしで打ち、敵のこぶしをはじいては、舟に下りたつていく。

人間業とは思えぬその身の軽さと平衡感覚に、観客は魅了された。

チャグムも、Aその演武を見つめていた。

——戦っている人の動きを見る時は……。

① 耳の奥に、なつかしい声が聞こえてきた。

——一点に気を奪われてはいけない。全体を見るんだよ。川の中に石があると水流が曲がるように、動きには、むかう方向が自然に現れる。全体を見ていると、攻撃がむかう先が読めるんだよ。

(……バルサ)

かつて自分を守ってくれた女用心棒の面影が、心に浮かんでいた。

カンバル王国に伝わるチキという体術を、バルサはチャグムに教えてくれた。攻防が一体となったその実戦的な体術の、ほんのさわりの技ばかりだったが、チャグムはこの三年のあいだ、ひとりになると、その一連の技をひそかにくりかえし練習してい

た。それは、チャグムにとつては体術の練習というより、バルサたちと過ごした思い出をたどることだったのだ。

時が経つうちに、いつのまにか、その一連の防衛は身にしみこみ、もはや考えることなく身体が動くまでになっていた。……いつか、バルサに上達した自分の技を見せたいが、それは、かなわぬ夢だろう。

さすがに疲れてきたのか、男たちの身体が大きく揺れることが多くなっていたが、タルサン王子の動きには、まだまだ余裕があった。

派手な水しぶきがあがった。ひとつ、ふたつ……三人が、たたき落とされて水中に消えて、しばらくしてから浮きあがって、恥ずかしそうに首をふって水を払った。鼻血を流している者もいる。観客から、ため息がもれた。

いちど均衡が崩れると、あとは、**B** 男たちのうごきが乱れはじめた。男たちの身体が交差するたびに、ひとり、ふたりと、水に落ち、残っているのはタルサン王子をふくめて、わずか三人になってしまった。

ダダダーン、と太鼓が続げざまに鳴り、その三人の勇者たちは、後ろを見ずに舟端を蹴って、後ろざまに宙に舞いあがった。——宙を跳んでこちらの岸へもどってくるタルサンの背を見た瞬間、チャグムの身体がびくつと動いた。

全身が燃えているように熱かった。太鼓の音の一打ち、一打ちに……すれちがいざまに容赦なくたたきこまれてくる男たちのこぶしの一打ち、一打ちに……タルサンは激しく高ぶっていた。——熱い熱い。力が全身に湧きあがってくる。タルサンは、心の中で叫んだ。

(おれを見ろ、兄上！ 殻に守られた真珠ではなく、宙を裂く鉾を弟に得たことをよろこべ！)

肩に男のこぶしがたたきこまれ、全身に衝撃を感じたが、タルサンは怯むことなく、その男の側頭にこぶしをたたきこんだ。男がふつとんで水に落ちるのを見て、よろこびが全身に湧きあがった。

(真珠など、殻がなければ、いかにもろいか、その目で確かめるがいい)

終演の太鼓が鳴り響いた瞬間、タルサンは舟端を蹴って宙に舞いあがった。そして、演武のあいだじゅう、ひそかに確かめていたチャグム皇太子の手前に着地すると、着地に失敗してよろけたふりをして身体を背後に大きく泳がせ、裏拳をチャグム皇太子めがけてふりおろした。

やわらかい頬ほおにこぶしが当たった……と思った瞬間、タルサンは自分のこぶしが硬かたいものに当たってはねあげられるのを感じた。つぎの瞬間、のけぞってたおれた自分の背を、だれかが強い力でがっちりだと抱きとめた。

タルサンと、抱きとめた者との目が合った。——タルサンとチャグムは、たがいに驚おどろきを浮かべた目で、しばらく、見つめあっていた。

「……なんという無礼を、タルサン！」

サルーナが立ちあがって、あえぐようにいった。思いがけぬ事故を、中庭中がしずまりかえって注目していた。サンガル王とカルナン王子があわてて立ちあがった。

「なんということだ！ チャグム皇太子殿下でんか、お怪我けがは？」

チャグムの後ろでは、席の背後という位置のわるさゆえに、皇太子を守るのに間にあわなかった、護衛ごえいの近衛士このえじたちが、失態を恥じてまっ青になっていた。

チャグム自身は、東つかの間ま、なにが起きたのかわからず、ぼうっとしていた。

身にしみこんだ体術のおかげで、とんできたタルサンのこぶしをとっさにはねあげて、たおれてきたその身体を受けとめたのだ、と気づいたのは、タルサンと目が合ってからだった。大柄おおがらなタルサンの身体が、いまになってずっしりと重く感じられてき

た。

③タルサンの目には、驚きの色が浮かんでいたが、④すぐに恥辱ちじよくと怒りいかの色に変わった。タルサンは耳までまっ赤になっていた。不意に、⑤自分のしたことの重大さに気づいたのだ。

相手は同盟国の皇太子だ。⑤避けられぬ事故だった、という言いわけで逃のがれられると思っていたが、たとえ事故でも、祝いの初日に、招待した側の王子が招かれて訪れた客人の皇太子を傷つけたとなったら、たいへんな失態となる。怒りにまかせて結果を軽く考えていた自分の幼さとつぜんが突然見えてきて、タルサンはふるえ、チャグム皇太子の前にひざまずいた。

気がつくつと、兄と父が自分を見おろしていた。彼らの顔に浮かんでいる表情を見て、タルサンの胃がぎゅっと縮んだ。……そのとき、頭上で声がした。

「……あれほどの激しい技。最後につまずかれても、無理はありません」

チャグム皇太子が、じつとタルサンの目を見つめていた。

「ご心配なく。わたしは、かすり傷ひとつ負っておりません。タルサン王子は、あれほど身体の均衡を失われていても、わたしのことを考えてくださっていたようです」

ほんのすこし前まで驚きに目を見ひらいていた少年と同一人物だとはとても思えない、おちついた声で、チャグム皇太子はい、不安げに見つめているサンガル王にほほえんでみせた。

「ほんとうに、すばらしい演武でした。……最後に、わたくしまでくわえていただけるとは、光栄でした。わが新ヨゴ皇国は、危急の折には、このようにタルサン王子の背後を守りましょう」

笑いをふくんだチャグムの言葉に観客の緊張がほぐれ、あちこちで、笑い声と拍手があがった。

サンガル王とカルナン王子は、ほつと肩の力を抜き、事をうまくおさめてくれたチャグムに心からの感謝を示して、席へもどっていった。——だが、タルサンだけは恥辱に身をふるわせていた。チャグムの訝えた機転は、あまりにもむごくタルサンを道化にしてしまった。タルサンは、はらわたが煮えくりかえる思いを必死におさえていた。

まるで幕でもおろすように、簡単に自分の気持ちを隠しさり、涼しい皇太子の顔になれるこの少年に憎しみを感じたが、それが逆恨みに過ぎないことも、よくわかっていた。だから、タルサンは胸の中で身もだえ暴れる野獣のような怒りをおさえこもうとした。自分を、逆恨みに身をまかせるほどみじめな男だとは、思いたくなかったのだ。

ふたたび楽師たちの演奏がはじまって、演武をした男たちが整列をした。

「——申しわけないことをいたしました」

D 言つて、深ぶかと頭をさげて列へもどろうとしたタルサンに、チャグムが思わず、小さな声で呼びかけた。

「……わたしは」

ふりかえったタルサンの目を、チャグムは見つめた。

「こんなくならないことを、わたしたちのあいだに刺さった棘にしたくない」

タルサンは眉をひそめ、色白の皇太子の黒い目を見つめた。

皇太子の目に、自分自身を嫌悪している色が浮かんでいるのに気づいて、タルサンは、驚いた。えらそうなことを言ってしまった

た(⑧) 気持ちは、チャグムの、かすかにしかめられた顔にも、現れていた。——超然と見おろすような表情は消えて、おなじ年頃の少年の顔が、はじめて見えていた。

しばらくだまってチャグムを見つめていたタルサンは、やがてみじかく答えた。

「わたしもです」

そして、一礼をして行きかけ、ふと、もう一度ふりかえった。

「チャグム皇太子殿下は、なにか武術を体得しておられるのですか？」

チャグムの目に明るい光が浮かんだ。その瞬間、<sup>⑨</sup>チャグムの印象が一変した。

「そういう話をしましょう。……式典のあいだに、時間がとれるなら」

タルサンは、きっぱりと一礼し、男たちの列へともどっていった。

(上橋菜穂子『虚空の旅人』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 ——線部①「耳の奥に、なつかしい声が聞こえてきた」とありますが、ここから始まる過去の回想が終わり、現実の場面にもどる最初の五字を本文中から抜き出して答えなさい。

問二 本文中の A D にあてはまる語を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 凍りついたように      イ 食い入るように      ウ しぼりだすように      エ なだれのように

問三 — 線部② 「殻からに守られた真珠しんじゆではなく、宙を裂く銛もりを弟に得たことをよろこべ！」について、

(1) 「殻からに守られた真珠」とありますが、ここでは何が「真珠」にたとえられているのですか。本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

(2) 「宙を裂く銛」を、たとえを用いずに十字以内で言い換えなさい。

問四 — 線部③ 「タルサンの目には、驚おどろきの色が浮かんでいた」とありますが、タルサンはなぜ驚いたのか、その理由を二十字以内で答えなさい。

問五 — 線部④ 「自分のしたことの重大さ」とありますが、自分が「重大」な失敗をしてしまった原因をタルサンはどう考えましたか。本文中から二十五字で抜き出して答えなさい。

問六 — 線部⑤ 「避けられぬ事故だった、という言いわけ」とありますが、あとでこのような「言いわけ」をするためにタルサンが取った行動を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 — 線部⑥ 「それが逆恨さかうらみに過ぎない」とは、チャグムの行動を恨むべきではないということですが、なぜ恨むべきではないのですか。チャグムの行動の意味を明らかにして三十字以内で答えなさい。

問八 — 線部⑦ 「胸の中で身もだえ暴れる野獣やじゆうのような怒りいか」とありますが、

(1) これと同じ感情を表現している言葉を本文中から十四字で抜き出して答えなさい。

(2) この「怒り」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 実力を過信して、演武で予想外の無様な失態をしかしてしまった自分自身への怒り
- イ とっさの機転を利かせた結果、自分を単なるおろか者の立場に立たせたチャグムへの怒り
- ウ チャグム皇太子にばかり注目して、自分をみとめてくれようとしなない父や兄に対する怒り
- エ チャグムに危害を加えるところだった自分を責めようとしなない観衆や家来に対する怒り

問九 本文中の(⑧)にあてはまる言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分を、いやなやつだと恥はじている
- イ タルサンを、少し心配している
- ウ タルサンを、軽べつしている
- エ 自分を、てれくさく感じている

問十 — 線部⑨「チャグムの印象が一変した」とありますが、これ以前のチャグムの印象はどのようなものでしたか。本文中から四十五字以内で述のべられている部分を探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問十一 チャグムという人物についてあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の高い身分や不自由な生活に満足しておらず、いつかは自由に別の人生を生きたいと心ひそかに考えている。
- イ 若くして政治的な思考力を備えており、いざとなれば人間らしい感情を殺して冷酷な決断を下すことができる。
- ウ 一人前の大人のように冷静な態度や言動を取る一方で、若者らしい情熱や感じやすいやわらかな心を持っている。
- エ 皇太子としての自分の立場をよくわきまえており、周囲にあなどられないよう常に尊大で高慢な態度を取っている。



## 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二、三歳の子どもは、ほとんど本能的な生き方をし、たいへん感覚的に物を見ていると思います。また、そのころの子どもは、たいへん視感が鋭うすまじございます。

このごろでは、自動車をたくさん見るチャンスのある幼い子は、表に通っている自動車の型を、片かた端はしから覚えてしまいます。二歳ぐらいの子どもが、「あれは、ベンツ、あれはフォード」などとやります。そこで、この子は天才かな、と思ってしまいます。親もいますが、ほんとは、そうじゃないんですね。そういう、視感的に、小さなちがいをパツとつかんでしまう、もって生まれた能力が、子どものなかにあつて、それは年とともにだんだん鈍にぶっていくんだろうと思います。そして、子どもは、こうして視感的にとらえたものを、だんだん蓄積ちくせきしていって、年のたつうちにその物のあいだの共通点をのみこみ、やがては抽象観念ちゅうしょうくわんねんとしてもつことができるようになる。でも、ごく幼い子どもたちには、まだまだ抽象的な観念はありません。毎日毎日、目の前にあらわれるものが、新しい発見です。よく子どもたちとつき合っていますと、昨日わからなかったことが、今日は、もうわかるので驚おどろいてしまうことがあります。

そして、やがて、六歳になると、学校にはいって、本式に本の——文字の世界にはいってゆくことになります。こういうことは、今日では、日常のできごとになってしまつて、私たちはごくあたりまえのことと思ひ、ふかくも考えなくなりがちですが、ほんとうはたいへんなことなんです。私たちの祖先——十万年前の裸はだかの祖先、いえそのまえの祖先からはじまつて、そういう人たちの努力の積み重ねが、今日のような、文字のある世界になっているんです。

①では、こういう子どもたちには、どういふお話がおもしろいかといえ、視覚的に頭の中に組みたてられるお話でなければだめなんでしょう。

私たちは、子どもたちの受けとり方を知るために、文庫でもよく声にだして本を読んでやりますが、そうしますと、いちばん子どもたち——いろんな子どもたちを幅広くひきつけるお話は昔話なんです。昔話が、それほど力があるということ、私は、子どもにじかにあたってみるまでは、夢にも考えてみなかったんです。いまの世の中には、昔話というものは古くさいもので、現代の子どもには用のないものであるかのように言う人も、たくさんあります。私は、それほどには思いませんでしたが、昔話②

の力が、これほど大きいことは、子どもを前にして話してやるまではわかりませんでした。

では、昔話は、いまお話した、子どもの脳の働くと、どんな関係があるでしょうか。皆さん、昔話というものを、とくとしらべてごらんになったことがあるでしょうか。昔話というのは非常に素朴そぼくなもので、高等な心理などにはまだはいりこめない子どもたちにも、たいへんよくわかる手段で語られております。

昔話は、古い時代に自然発生的にできたもので、それを生んで、育ててきた人たちは、文字を知らない人たちです。そういうふうな人たちは、物の考え方が、いまの小学校へ行く前の子どもに、非常によく似ていたんじゃないかと思うのですね。では、それはどういう考え方かというところ、Iということなんです。

いったい、抽象観念というものは、社会に文字が普及ふきゅうしてから、私たちの間に非常にふえたものなので、昔の庶民しよみんのあいだには、たいへん少なかった。けれども、その人たちも物を考え、お話をたのしむことはした。しかし、そのお話は、③具体的な事件の積み重ねでないと、理解しにくかった、その物の考え方が、いまの幼い子どもにぴったりなんです。

(A) どういうふうな順序で昔話が語られていますかといいますと、「昔々、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山へ柴刈しばかりに行って、おばあさんは川に洗濯せんたくに行きました」という調子です。このように、最初のセンテンスで、時と場所と主人公が紹介しょうかいされてしまいます。そうしてその主人公は、第二の文章に入りますと、すぐ動きはじめます。「おじいさんは山へ柴刈りに行って、おばあさんは川に洗濯に行きました。」

こういう話を聞いていて、子どもたちの頭のなかでなにが行われているかといいますと、語られることは、全部、④子どもたちの頭のなかに絵になってあらわれてまいります。(B)、「おばあさんが洗濯しておりますと、川上から桃ももがドンブリコドンブリコと流れてきました。」もう全部これも絵になります。そして、一ばん大本の本筋だけで、よけいな修飾しゅうじやくはありません。たとえば、おばあさんは非常にくたびれて腰こしが痛くなったりとか、そういうふうな細かいことは、なに一つついていません。おばあさんが洗濯していると、桃が流れてきたので、おばあさんがそれをひろって、というふうな骨組みだけのような、単純な順序で運ばれます。

(C)、そういうかんたんな話は、つくるのにやさしいかというと、たいへんむずかしいのですね。そういう、⑤いらぬひらひらのついてない絵で表わすことになりますと、絵はどんどん移らないと——絵がたちどまってしまつてしまつと、聞き手の思考も

たちどまり、聞き手はたいくつします。

こういうように、Ⅱ 線の絵だけで、物事をどんどん動かしながら、愛情の物語だの、正義の物語だのを語らなければならぬとなると、たいへんむずかしいのですが、昔の文字のない芸術家たちは、それをりっぱになしとげていつてしまっているのですね。たとえば、<sup>⑥</sup>親と子が別れ別れになっていて、万難を排<sup>はず</sup>して、子どもが親に会いに行ったという形で物語ったり、よ<sup>⑦</sup>くばりじいさんが、ひとの物をとろうとして、失敗したというような話にして、子どもはそれを喜んできました。こういう話は、いまの小学校一、二年の子どもにも、ぴったりあてはまる話です。(D)、いまの子どもと昔の人とちがうところは、いまの子どもが、こういう具体的なことだけの物の考え方から、どんどん卒業して、先の世界へはいつていくということですね。それは、かれらのまわりの社会が、昔の社会とは、すっかりちがっているからです。けれども、日本で、いまつくられる子どものための創作物が、まだまだ子どもたちにもみこみにくいというのは、この子どもが育ってくる時期の物の考え方を、私たちおとなが、まだ十分つかんでいないで、やたらに心理的なことをもちこんだり、絵をたちどまらせたりしたことからくるのだと思います。

<sup>⑧</sup> きょうは、どうい文章が、子どもの心の中にはいりにくくて、どういのが、はいりやすいという实例をもつてまいりませんでしたけれども、みなさん、これから、子どものお話をお読みになる時、どれくらいの部分か、目に見える材料で書かれているか、どれくらいが心理描写<sup>びようしゃ</sup>か、またはどれくらいその部分の人物が行動しているか、どれくらいが情景描写かということに気をつけていただきたいと思ひます。そして、具体的であり、動いているところの多い方が、ずっとつよく子どもたちに理解でき、訴<sup>うった</sup>え方もつよいと見てくださって、まちがいないと思ひうのです。

(石井桃子談話集「子どもに齒ごたえのある本を」より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 — 線部①「こういう子どもたち」の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小学校にあがる以前の幼い子どもたち
- イ 本格的な文字の世界に入っていく子どもたち
- ウ 今日の、文字のある世界を生きている子どもたち
- エ 抽象的な観念がわかるようになった子どもたち

問二 — 線部②「昔話の力」とは具体的にはどのような力ですか。「力」につながるように本文中の表現を十五字以上二十字以内で抜き出して答えなさい。

問三 本文中の「I」にあてはまる表現として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 視覚的で、具体的ではない
- イ 話し言葉的で、論理的ではない
- ウ 具体的で、抽象的ではない
- エ 自然的で、人間的ではない

問四 — 線部③「具体的な事件の積み重ねでないと、理解しにくかった」とありますが、誰だれにとって「理解しにくかった」のですか。適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昔の庶民しよみん
- イ 幼い子どもたち
- ウ 文字を知らない人たち
- エ 小学校にあがる前の子ども
- オ 昔話をたのしむ人たち

問五 本文中の（A）～（D）に入る最も適当な語を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。  
ア さらに                    イ ところが                    ウ それから                    エ ただ                    オ では                    カ たしかに

問六 — 線部④について「子どもたちの頭のなかに絵になってあらわれ」る、とほぼ同じ内容を示す表現をこれ以前の本文中から探し、十五字で抜き出して答えなさい。

問七 — 線部⑤「いらぬひらひら」をわかりやすく言い換えた表現を、本文中より五字以上十字以内で抜き出して答えなさい。  
い。

問八 本文中の Ⅱ にあてはまる語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弱い                    イ 太い                    ウ 細い                    エ うすい

問九 — 線部⑥「親と子が別れ別れになっていて、万難を排して、子どもが親に会いに行ったという形で物語った」、⑦「よくばりじいさんが、ひとの物をとろうとして、失敗したというような話」の具体例として適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア はなさかじいさん                    イ 母をたずねて三千里                    ウ かちかち山                    エ マッチ売りの少女  
オ フランダーズの犬                    カ うらしまたろう                    キ いっすんぼうし                    ク さるかにばなし

問十 — 線部⑧について後の各問いに答えなさい。

ただし、(1) (2) とも以下の条件を満たすように答えること。  
・本文中にあげられている特徴をそれぞれ二つ以上入れること。  
・「くない」「くず」といった否定表現を使わないこと。

- (1) 「子どもの心の中にはいりやすい」文章とはどのようなものですか。十字以上二十字以内で答えなさい。
- (2) 「子どもの心の中にはいりにくい」文章とはどのようなものですか。十字以上二十字以内で答えなさい。

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字になおしなさい。

- |   |                                                                        |    |                      |
|---|------------------------------------------------------------------------|----|----------------------|
| 1 | ジヨウのある食べ物。                                                             | 2  | ケンゼンな考えで行動する。        |
| 3 | キョウカイセンを定める。                                                           | 4  | 茶道の先生のお宅をジキョする。      |
| 5 | りっぱなココロがまえ。                                                            | 6  | 彼はとてもハクガクで何でも答えてくれる。 |
| 7 | キビしい態度でのぞむ。                                                            | 8  | 当直のニツシを書いて報告する。      |
| 9 | ジュウオウ無 <sup>む</sup> 尽 <sup>じん</sup> の活 <sup>かつ</sup> 躍 <sup>やく</sup> 。 | 10 | セイジュン派の女優を目指す。       |

令和四年度入学試験

二月一日(午後) 実施

東京女学館中学校



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一

問二 A

B

C

D

問三

(2)

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

二問一

問二

問三

問四

問五 A

B

C

D

問六

問七

問八

問九 ⑥

⑦

問十

(2)

三

9

5

え

10

7

しい

8

4

評

点

力



受験番号

氏名